

ベルリン・シャウビューネ劇場
原作：エドゥアール・ルイ
演出：トーマス・オスターマイアー

「暴力の歴史」

History of Violence (原題：Im Herzen der Gewalt)

2019年10月24日(木) ~26日(土)

会場：東京芸術劇場 プレイハウス

2019年9月1日(日)10:00～ チケット一般発売



写真: Arno Declair

社会に黙認された暴力の形を、あなたはどうか受けとめる？

ベルリンを拠点とするドイツの名門、シャウビューネ劇場による演劇作品。フランス人作家エドゥアール・ルイは、この作品の原作となった自伝的小説『暴力の歴史』でトラウマとなる一夜を多層的に再現することにより、**成長、欲望、移住人種差別について個人的かつ社会的な分析を鋭く展開する**。セクシュアル・マイノリティとしてアイデンティティと家族との葛藤、差別意識を内包するアルジェリア系男性との束の間の恋、そして彼に加えられた凶行に対する多様な反応。それらを通し、**厳然と存在するにも関わらず、社会に容認され、黙殺され、そして再生産される暴力の形を明らかにしていく**。登場人物が体験するあらゆる理不尽さと暴力を取り巻く問題は普遍性を持ち、決して対岸の火事では済まされない。今の日本で観るべき作品と言える。10以上の役柄をたった4名で演じるという配役、ドラマーによる生演奏、スマートフォンで撮影された映像のライブ投影。世界の演劇界で常に注目されるトーマス・オスターマイアーによるそれらの演出が、観る者の視聴覚を大いに刺激することだろう。

本件に関するメディアの方からのお問合せ：東京芸術祭実行委員会事務局 広報担当：小仲

Tel: 050-1746-0996 (平日10:00-18:00) Email: press@tokyo-festival.jp

写真素材の提供についてもお気軽にお問い合わせください

ストーリー

早朝4時のパリ。青年エドゥアールはクリスマスディナーから帰宅する途中、レピュブリック広場でアルジェリア系の男レダと知り合う。弾んだ会話はいつか変わりに変わり、そのままエドゥアールはレダを自分の部屋へと連れ帰る。二人はその夜を共に過ごし、レダは自分の幼少期とアルジェリアからフランスへ逃げてきた父親の話をする。浮かれた雰囲気の中で二人は笑い、愛撫しあい、ベッドを共にする。しかし数時間後、別れ際にエドゥアールが自分のスマートフォンがなくなっていることに気づくと、突然、暴力的な空気が部屋を支配する。レダはエドゥアールを銃で脅し、レイプする。翌朝、エドゥアールは警察、そして病院にいる。このトラウマにどう向き合っていくか途方に暮れた彼は、逃げ込むように北フランスの田舎に暮らす姉のクララを訪ね、彼女に事情を打ち明ける。この劇的な出来事に対する周りの人々、警察官、医師の意見や反応は、社会に深く根付いた人種差別、ホモフォビア、そして不透明な権力構造を暴いていく。



写真: Arno Declair

『暴力の歴史』は、自尊心、野心、抗いがたい欲望に支配された人間の、息の詰まるようなその「存在」にスポットを当てる。劇場でこのような作品を観られる機会は皆無と言っていいだろう。

ルーディガー・シャーパー、ターゲスシュピーゲル紙（2018年6月5日付）

レダが凶器を取り出しエドゥアールを暴力的に犯すとき、その場は混じり気のない息苦しさで支配される。観客は目を閉じ、そして可能ならばすぐにでも劇場を後にしたいと思うだろう。観客を忍耐の限界にまで連れていくこの作品が終演した瞬間には総立ちの拍手が起こった、とりわけそれは舞台上に連れてこられた原作小説の著者エドゥアール・ルイに捧げられた。どれほどセンシティブそして多層的に自らの文章と体験が扱われ、作品化されたかについて彼は明らかに感動し、幸せそうにしている。忘れがたい劇場での一夜。

フランク・ディートシュライト、メルキッシェ・アルゲマイネ・ツァイトゥング紙（2018年6月6日付）

プロダクションノート

*今作品のドラマトゥルクであり翻案の共同執筆者であるフロリアン・ボルヒマイヤーによって編纂（抜粋）。

エドゥアール・ルイの『暴力の歴史』を演出するアイデアは作家ディディエ・エリボン原作『ランスへの帰還』の舞台作品に取り組んでいた時期に生まれたものである。エリボンはエドゥアールの教師およびメンターであっただけでなく、エドゥアールと同じく地方の労働者階級の出身であり、青年期に哲学と社会学を勉強するためにパリに来て作家になったという経歴、そして芸術的な進展において二人には多くの共通点がある。両者共に、ホモセクシャルとしてフランスの地方や小都市の痛切なまでに男性優位主義なコンテキストの中に育ったことに由来する屈辱的な経験を持ち、それゆえに郷里から暴力とホモフォビアが一掃される欲求を感じている。それはルイの処女作『エディに別れを告げて』に描かれた物語である。

エリボンとは異なる世代に属するルイは、その逃避行の中で新しい対立と社会的現象に直面する。小説『暴力の歴史』は、若い作家エドゥアールとカーブル州出身の男レダの偶然の出会いの記録、そして暴力、レイプ、最終的に殺人の試みに至る情熱のクロニクルである。そして平等で人道的な、しかし実際には排外主義的な思想をいつの間にか公然と支持している我々の現実社会への攻撃へと発展していく。

我々は小説の舞台作品化にあたり、原作の断片的な構成と多声構造を保持する方向で翻案を行った。主人公である一人称の語り手は起こった出来事を描写する。内部の声（反逆的なアルター・エゴの一種）は、主体的主人公を論評し異議を唱える悪魔の代弁者としての役割を果たしている。エドゥアールの姉クララは彼女の視点から夫にあらましを伝えるが、そこには弟に対する彼女自身の偏見が織り混ざっている。エドゥアールは、警察署で証言したことによってあの夜の状況を追体験することになった上、警察官の批判的で非難的な詰問に応じなければならなかったという屈辱的な場面に何度も繰り返し立ち戻る。

多様な芸術的言語と生き生きとした多層的表現方法のコンビネーションによって、舞台作品『暴力の歴史』は翻案作品にありがちな「文芸的」なものでは決してない、非常にエネルギッシュなものとなった。俳優たちは皆、創意に富み着想豊かであり、最終版制作の大部分に参加した。結果、この作品は素晴らしいエナジーに支えられたものになっている。広い舞台、そして大人数のアンサンブルを必要とするトーマス・オスターマイヤーの近年の演出作品と対照的に、このミニマルなプロダクションは即興空間的ダイナミクスを獲得している。

作品クレジット

原作 エドゥアール・ルイ著『暴力の歴史』(2016年)

演出 トーマス・オスターマイアー

独仏翻訳 ヒンリッヒ・シュミット=ヘンケル

トーマス・オスターマイアー、フロリアン・ボルヒマイヤー、エドゥアール・ルイによるドイツ語での初演翻案

出演 クリストフ・ガヴェンダ、ラウレンツ・ラウフェンベルク、レナート・シュッフ、アリーナ・シュティーグラ、

演奏 トーマス・ヴィッテ

演出助手 ダーヴィッド・シュトエル

舞台美術/衣装 ニーナ・ヴェッツェル

音楽 ニールス・オステンドルフ

映像 セバスティアン・デュピ

ドラマトゥルク フロリアン・ボルヒマイヤー

照明 ミハエル・ヴェッツェル

振付 ヨハンナ・レムケ

製作 Schaubühne Berlin

共同製作 Théâtre de la Ville Paris, Théâtre National Wallonie-Bruxelles and St. Ann's Warehouse Brooklyn.

初演 2018年6月

プロフィール

エドゥアール・ルイ (原作)

1992年フランスのピカルディー生まれ。パリ国立高等師範学校在学中からフランス大学出版局 (PUF)で叢書の編集主幹を務め、ミシェル・フーコーの講演などを編集。21歳のとき、故郷で受けた壮絶ないじめと極貧の生活を描いた私小説『エディに別れを告げて』を発表、「ピエール・ゲナン反ホモフォビア賞」を授賞。この作品はすでに15カ国で翻訳権が売れ、日本語訳も出版されている。自ら改名した「ルイ」はジャン＝リュック・ラガルスの戯曲『たかが世界の終わり』の主人公の名前。ゲイの青年がエイズを発症し、故郷である殺風景な村に戻る話で、グザヴィエ・ドランにより映画化もされている。最新作『私の父を殺した者 Qui a tué mon père』(2018)も今年スタニスラス・ノルデー演出で舞台化。現在フランスで最も注目されている作家の一人。

トーマス・オスターマイアー (演出)

1968年西ドイツのゾルタウ生まれ。96年～99年ベルリン・ドイツ座の小スペース「バラック」芸術監督。99年からシャウビューネにて演出および芸術監督を務める。それに並行し、ミュンヘン・カンマーシュピーレで映画を原作とした『マリア・ブラウンの結婚』(2007)、ウィーンのブルク劇場でイプセンの『棟梁ソルネス』(2004)、パリのコメディ・フランセーズでシェイクスピアの『十二夜』(2018)等を演出。2004年よりアヴィニョン演劇祭の顧問として、定期的に新作公演。演出作品は欧州に限らず世界中で上演され、数々の受賞歴を誇る。18年、文化政策における貢献に対してドイツ連邦共和国功労勲章。日本上演：2005年イプセン原作『ノラ～イプセン「人形の家」より』、同年マリウス・フォン・マイエンブルク原作『火の顔』、2018年イプセン原作『民衆の敵』。

シャウビューネ劇場について

1962年西ベルリンに設立。99年よりトーマス・オスターマイアーが芸術監督を務める。毎シーズン、10本以上の新作が初演される他、30本以上のレパートリー作品が入れ替わりで上演される。99年から協働し、継続的に新しいメンバーを迎えて拡張を続けており、ダンス、音楽劇などの新しい形式も取り入れる演出スタイルの多様性が特徴である。ストーリーを物語ること、そして古典や現代テキストの精緻な浸透に焦点を当てた同時代的で実験的な演劇言語を探究。レパートリーには代表的な世界文学の演出作、国際的に評価の高い小説家の現代劇がある。ドイツ国内のみならず、海外公演実績多数。

<https://www.schaubuehne.de/en/start/index.html>

公演概要

公演名称 ベルリン・シャウビューネ 劇場「暴力の歴史」
原作 エドゥアール・ルイ
演出 トーマス・オスターマイアー
公演日程：2019年10月24日(木) 19:30
10月25日(金) 19:30
10月26日(土) 14:00

※受付開始は開演の1時間前、開場は30分前
上演言語：ドイツ語（日本語・英語字幕付）
上演時間：約135分（休憩なし）
※推奨年齢16歳以上
※公演には一部、性的・暴力的な表現が含まれています。

会場：東京芸術劇場 プレイハウス
TEL：03-5391-2111
〒171-0021 東京都豊島区西池袋1-8-1
JR・東京メトロ・東武東上線・西武池袋線 池袋駅西口より徒歩2分
駅地下通路2b出口と直結

託児サービスのご案内
（有料・定員制・希望日1週間前迄に要申込）
〔ご予約・お問合せ〕 HITOWA キャリアサポート株式会社 わらべうた
0120-415-306（平日9:00～17:00）
詳細：<http://www.geigeki.jp/house/barrierfree.html>

チケット

9月1日(日)10:00～ 一般発売

料金【全席指定・税込】

一般S席：前売5,000円 当日5,500円
一般A席：前売4,000円 当日4,500円
障害者割引：S席4,500円 A席3,600円
29歳以下(A席)：3,000円
※未就学児童は入場不可
※障害者割引は前売のみ、東京芸術劇場ボックスオフィス電話・窓口のみ受付
※29歳以下割引は、東京芸術劇場ボックスオフィスのみ取扱い。
（前売のみ・枚数限定・要証明書）
※車椅子で観劇をご希望の方は東京芸術劇場ボックスオフィスまでお問い合わせください。

取扱

■東京芸術祭チケットセンター
<https://tokyo-festival.jp/2019/ticket/>
※インターネットでのチケット購入には、芸劇メンバーズへの登録(無料)が必要
■チケットぴあ: 0570-02-9999 (24時間・音声自動応答)
【Pコード：496-624】
<http://t.pia.jp/>
■イープラス: <https://eplus.jp/>（PC・スマートフォン）
※ファミリーマート店内Famiポートでも直接購入可能。
■Confetti (カンフェティ): 0120-240-540（平日10:00～18:00）
<https://www.confetti-web.com/bouryoku>
■東京芸術劇場ボックスオフィス
【窓口】 10:00～19:00(東京芸術劇場1階/休館日を除く)
【電話】 0570-010-296(ナビダイヤル)
10:00～19:00(東京芸術劇場休館日を除く)
【WEB】 <http://www.geigeki.jp>

公演についてのお問い合わせ先

東京芸術祭実行委員会事務局
〒102-0073 東京都千代田区九段北4-1-28
九段ファーストプレイス8F アーツカウンシル東京内
TEL: 050-1746-0996（平日10:00～18:00）
<http://tokyo-festival.jp>

公演クレジット

主催：東京芸術祭実行委員会 [豊島区、公益財団法人としま未来文化財団、フェスティバル/トーキョー実行委員会、公益財団法人東京都歴史文化財団（東京芸術劇場・アーツカウンシル東京）]
後援：ドイツ連邦共和国大使館／ゲーテ・インスティトゥート東京 東京ドイツ文化センター
在日フランス大使館／アンスティチュ・フランセ日本
制作：株式会社precog

